まずは乳がん検診を

低い検診率 啓蒙が大事　岡田氏

早期発見で完治できる　角舎氏

40～50代 年1回受診を　稲田氏

肥満体型 危険因子にも　長野氏

■パネリスト

広島大教授	岡田守人氏
広島大原爆放射線医科学研究所 腫瘍外科講師	角舎学行氏
中央通り乳腺検診クリニック院長	稲田陽子氏
ひろしま駅前乳腺クリニック院長	長野晃子氏

乳がんにかかる女性は年々増え、全国で毎年約6万人が新たに診断されている。広島県の乳がん検診の受診率は24・4％（2012年度）。全国平均を上回っているものの、過去3年間は横ばいが続いている。乳がんは早期に発見、治療すれば、高い確率で治る病気と言われている。また、近年は、乳房の形を崩さない手術の進歩や治療薬が増えるなど、治療の選択肢が広がっている。乳がん検診の必要性や最新の治療法について、広島大教授の岡田守人氏、広島大原爆放射線医科学研究所腫瘍外科講師の角舎学行氏、中央通り乳腺検診クリニック院長の稲田陽子氏、ひろしま駅前乳腺クリニック院長の長野晃子氏が意見を交わした。

座談会では、乳がん検診の必要性や治療法などについて意見を交わした

―乳がんはどんな病気ですか。

岡田氏　日本人女性がかかるがんの中で1番多い病気です。罹患率は毎年約5％ずつ上昇し、過去30年間で約5倍に増えています。最も多い症状はしこり。9割以上の人がしこりによって乳がんが見つかっています。しこりを自覚したときには、がんの大きさは1・5㌢から2㌢。自覚するより早く見つけてほしいです。

稲田氏　乳がんの発症は20歳代後半から認められ、40歳代後半から50歳代にピークを迎えます。高齢者の乳がんも増えています。初期は痛みがほとんどなく、急にしこりが大きくなって検診に来る人がいます。無症状でも積極的に受診することが必要です。

―早期発見で治る病気と言われています。

角舎氏　早期発見により完治できます。以前は2㌢までの大きさの乳がんでリンパ節転移がないものを早期乳がんと呼んでいました。しかし早期乳がんの中にも悪性度が高く再発する症例もあることが分かり、今ではさらに小さい状態での発見が望まれます。

長野氏　結婚、出産、仕事などライフサイクルに影響が出やすい病気なので、確実に治る状態で見つけたいです。治療も進歩し、早期乳がんでは9割以上が治癒します。

―広島県の乳がん検診率は24・4％です。全国平均より高いものの、過去3年間は横ばいです。

岡田氏　欧米では70～80％と高く、死亡率も減っています。日本の検診率は低く、啓蒙活動の少なさ、仕事や子育てに追われて時間がないという理由が挙げられます。

長野氏　乳房は女性にとって特別な場所、恥ずかしさから受診の敷居は高いのです。自分は大丈夫と考える人も多いです。

―乳がんになりやすい人は。

角舎氏　アルコールを飲む人やたばこを吸う人がなりやすいとされています。他には出産経験、授乳経験のない人。最も注意するべきなのは家族に乳がんの患者がいる人です。乳がん全体の5～10％が遺伝によると言われています。

長野氏　加えて、女性ホルモンにさらされる期間が長い人。初潮が早い、閉経が遅い、ホルモン剤や経口避妊薬を長期間使用した人もリスクが高いです。閉経後は女性ホルモンであるエストロゲンは脂肪内でつくられるため、肥満も危険因子となります。

―どんな治療法がありますか。

角舎氏　全身治療と局所治療です。全身治療は、全身転移の可能性がある場合に行いますが、抗がん剤やホルモン療法、分子標的治療があります。局所治療には手術と放射線治療があり、がんをきれいに取り除くことが目的です。

―適切な検診は。

稲田氏　2年に1回。乳がんが多い40～50歳代の人には1年に1回受診してほしいです。マンモグラフィーと超音波を併用すると発見率は3割増です。検診の注意点は年齢によって適切な検診をすること。視触診だけの不十分な検診や、20歳代にマンモグラフィーを過剰に撮影する検診は控えて下さい。

―乳房を切るのはつらいという女性が多いです。

角舎氏　術式を選ぶ目安になるのはがんの大きさです。3㌢までなら乳房温存術は可能と言われています。大きい場合、抗がん剤で小さくすれば乳房温存術が可能です。2013年から乳房再建に使う人工乳房が保険適応になり、費用負担が楽になりました。無理に乳房温存術を選ばずに、乳房切除＋再建を選ぶ人が増えてきました。

―医師や病院選びの注意点は。

角舎氏　広島県には約30人の乳がん専門医がいます。100例以上の手術を執刀し筆記試験を合格した医師です。県や日本乳がん学会のホームページに医師や病院が掲載されています。

稲田氏　乳がんの定期的フォローは少なくとも5年はかかります。病院の通いやすさに加え、信頼できる先生を見つけること、さらに家族のサポートが大切です。

岡田守人氏

おかだ・もりひと　広島大教授。広島大原爆放射線医科学研究所放射線災害医療研究センター腫瘍外科研究分野、広島大学病院乳腺外科・呼吸器外科など。1995年、神戸大大学院医学系研究科修了後、米国ニューヨーク・コロンビア大・胸部心臓外科などで勤務していた。環境省中央環境審議会専門委員。

角舎学行氏

かどや・たかゆき　広島大原爆放射線医科学研究所腫瘍外科講師。1992年広島大医学部卒業後、広島大医学部付属病院、県立広島病院などで研修。広島大大学院で医学博士を取得し、ニューヨーク・マウントサイナイ医科大学癌センターや中国労災病院などの勤務を経て、2011年から現職。日本乳癌学会評議員乳腺専門医。

稲田陽子氏

いなた・ようこ　中央通り乳腺検診クリニック院長。1998年広島大卒業。広島大腫瘍外科、国立病院機構九州がんセンターでの勤務を経て、2008年から現職。検診マンモグラフィ読影認定医（AS判定）。日本外科学会認定医。

長野晃子氏

ながの・あきこ　ひろしま駅前乳腺クリニック院長。2001年広島大医学部医学科卒業。広島大第一外科、呉医療センター・中国がんセンター外科、呉共済病院外科の勤務を経て、13年から現職。日本乳癌学会専門医。